

豊島区のバイオマス活用事例

豊島区では、区立小中学校の給食残さなど区施設から出る生ごみを、バイオマスとして活用しています。区施設から出る生ごみの一部は、有機肥料として生まれ変わっています。また、電気にリサイクルするモデル事業においても利用され、バイオマスの新たなリサイクル手法について検証をしています。

ゆたかゆうき

学校給食から有機肥料へ「豊有機」

平成10年度からごみの削減と資源循環のために、区施設から回収された生ごみを処理して、肥料に再生しています。回収された生ごみは、江東区にある処理施設でコンポスト化により1次処理され、埼玉県のある処理施設で成分調整されて有機肥料の「豊有機」として製品化されています。この「豊有機」は、区役所や区内園芸店等で販売し、家庭菜園や庭木に利用されています。



再生された
有機肥料
「豊有機」



「エコのわ」もバイオマスを使用しています

本誌「エコのわ」は、お米(米ぬか油)を使用したインキ(=ライスインキ)で印刷されています。ライスインキには、これまで廃棄していた、お米を精米したあとに出る米ぬかからしぼった米ぬか油が再活用されています。

こうしたバイオマスを活用した商品には、「バイオマーク」が表示されています。



バイオマス
登録No. 080041
(社)日本資源有機協会が
認定した商品に表示される。

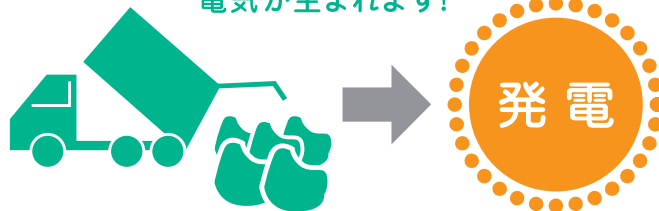
生ごみを電気にリサイクル「生ごみ発電モデル事業」

大田区城南島にあるバイオエナジー株式会社のプラントでは、区施設からでた生ごみから、電気と熱のエネルギーを生み出しています。この施設では、1日で50万人が出す量に相当する110トンの生ごみを処理することができます。発電量は1日24,000kWhで、およそ2,400世帯をまかなえる電力です。この施設で作られた電気は自然界のCO₂を増やさずに作られた電力であり、1日14トン、1年でおよそ5,000トンのCO₂削減効果をもたらしています。こ



で作られた「電気」は電力会社に売電されています。さらに余剰に生成された「ガス」は、平成22年12月から試験的にガス会社に供給されています。

集められた豊島区が生ごみから、この工場で
電気が生まれます!



Column いのちのつながり(下)

豊島区の木ソメイヨシノ、私たちが花見の宴を楽しんでいるとき、木の上でも花を楽しむ鳥たちが宴を開いています。目につくのがメジロとヒヨドリ。この鳥たちが甘いサクラの蜜を吸うとき、雌しべの先に花粉を運んでくると、ソメイヨシノは実を結びます。2ヶ月後、黒く熟した実は甘いサクランボ。また、鳥が来て実をついばみ、タネを撒き散らします。

この鳥たちは、秋にはサザンカの蜜、次いで冬のツバキ、そして



区の木ソメイヨシノの蜜を吸っているメジロ

早春のウメと、庭や公園で次々に咲く花の蜜を、餌の少ない冬場をのりきる大切な食料としています。楽しみにと私たちが栽培している花の蜜が、鳥の生活を支えているのです。その後、繁殖期

に入った鳥は、幼鳥のために毛虫やいも虫を狩り、植物たちを守ります。農薬を使わずに公園や庭の木々が健全に育つのも、こうしたいのちの輪があるからです。

また、人々が庭や公園に植えた草花には、ハチやチョウ、ハナアブなど、多様な昆虫が蜜を吸いに来ます。こうして町の中で増えた昆虫は、郊外に広がり農作物の受粉を手伝い、野山に生える草木の受粉をして、タネを残すことにもなるはずです。

都市で生活する私たちが草木をいつくしむことは、CO₂を削減するだけでなく、知らず知らずのうちに鳥や昆虫など野生の動物の、多様ないのちを養うことに繋がっていたのです。

文/写真
田中 肇さん(一昨年まで南大塚在住)
日本花粉学会評議員
「昆虫のあつまる花ハンドブック」
「花と昆虫がつくる自然」など著書多数

